

松前町にかかわる  
近隣の史跡・文化財等

平成13年(2001)



松前町教育委員会

## 発 刊 に よ せ て

ふるさと松前町は「水と緑の美しい自然環境の調和のとれたまちづくり」へとさらなる発展を遂げようとしています。

その過程で先人の残した有形、無形の文化財は遠い祖先が知性を結集した表われであり、この貴重な遺産は、多くの人々によって受けつがれ、あるいは記録として残されるなど今日まで伝承されて参りました。申すまでもなく新しい文化は、過去の文化の上に創造されるものであり、現代に生きる私達は過去への愛着を持ちながら輝かしい未来をつくるものだと思います。

今日の我が国は、すばらしい経済成長をもたらした生活文化は大きく発展向上した反面、心の豊かさが失われ、ふるさと意識まで変容し、かけがえのない文化遺産などは、はや忘れられようとしています。

このときに文化財保護審議会委員等の協力を得ながら広く町民を対象に郷土の歴史と文化財、史跡への見聞を広げる文化財めぐり、遺跡めぐり等の活動を図ってまいりました。今回は町内ばかりでなく近隣の町村の文化遺産に目をむけていただくとう文化財保護審議会委員の並々ならぬご尽力、ご協力によって待望の「松前町にかかわる近隣の史跡、文化財等」の発刊を見ることができました。

今後この文化財誌を町民の多くの方々に読んでいただき、学校では郷土の学習に、社会では、ふるさとの研究資料としてご利用下さることを念願するものであります。

最後になりましたが、編集にあたりご尽力いただきました、文化財保護審議会委員の方々、並びに各関係者の方々に心から感謝申し上げ、寄せる言葉とします。

平成13年10月

松前町教育委員会教育長 赤星 皓一

# 文化財位置図



# 文化財一覽表

## 伊予市

- ① 栄養寺
- ② 光明寺
- ③ 郡中巷衢創業誌碑
- ④ 彩浜館
- ⑤ 南邨鷺野先生碑
- ⑥ 海雲寺
- ⑦ 宝珠寺
- ⑧ 浜出稲荷神社
- ⑨ 長泉寺

## 砥部町

- ⑩ 古桶井手
- ⑪ 赤坂泉
- ⑫ 八倉公民館
- ⑬ 衣更着神社
- ⑭ 円通寺
- ⑮ 魔住が窪(地藏堂)
- ⑯ 理正院
- ⑰ 宮内城山
- ⑱ 工藤窯(現哲山窪)
- ⑲ 千里城

## 久万町

- ⑳ 善通寺お霊屋
- ㉑ 三島神社
- ㉒ 法然寺

## 松山市

- ㉓ 日招八幡大神社
- ㉔ 雄郡神社
- ㉕ 松前町
- ㉖ 岡井藤志郎の碑
- ㉗ 松山城城院
- ㉘ 不論院寺
- ㉙ 長建寺
- ㉚ 来迎寺
- ㉛ 宝珠院常福寺
- ㉜ 石手寺
- ㉝ 正円寺
- ㉞ 刈屋畑・地院
- ㉟ 如来院
- ㊱ 日尾八幡宮
- ㊲ 荏原城跡
- ㊳ 鍵谷カナ記念堂

## 重信町

- ㊴ 浮嶋神社
- ㊵ 徳威三島神社
- ㊶ 水天宮

## 川内町

- ㊷ 金毘羅寺
- ㊸ 雨滝

## 北条市

- ㊹ 国津比古命神社



## 松前町にかかわる近隣の史跡・文化財等の目次

番 号	項 目	関連史跡・文化財等	所 在 地	頁
<b>伊 予 市</b>				
1	栄 養 寺	武 知 五 友 の 墓	灘 町 4 丁 目	1
2	光 明 寺	加 藤 唯 明 の 墓 碑	灘 町 海 岸 通 り	2
3	郡 中 巷 衢 創 業 誌 碑	武 知 五 友	灘 町 五 色 浜	3
4	彩 浜 館	領 界 石	灘 町 五 色 浜	4
5	南 邨 鷺 野 先 生 碑	鷺 野 南 邨	灘 町 五 色 浜	5
6	海 雲 寺	後 藤 氏 系 凶	米 湊 (本 郷)	6
7	宝 珠 寺	彦 七 奉 納 の 甲 冑	谷 上 山	7
8	浜 出 稻 荷 神 社	森 田 雷 死 久 の 句 碑	上 吾 川 本 谷	8
9	長 泉 寺	後 藤 又 兵 衛 の 墓 碑	宮 下 南 組	9
<b>砥 部 町</b>				
1	古 桶 井 手	矢 取 川 事 件	八 倉	10
2	赤 坂 泉	明 和 水 論	重 光	11
3	八 倉 公 民 館	窪 田 兵 右 衛 門 の 墓 碑	八 倉	12
4	衣 更 着 神 社	窪 田 兵 右 衛 門	八 倉	13
5	円 通 寺	窪 田 兵 右 衛 門 の 墓	重 光 (拾 町)	14
6	魔 住 が 窪 (地 蔵 堂)	大 森 彦 七 (鬼 女)	重 光	15
7	理 正 院	楼 門 加 藤 嘉 明	麻 生	16
8	宮 内 城 山	大 森 彦 七 供 養 塔	宮 内	17
9	工 藤 窯 (現 哲 山 窪)	か ら つ 船 (わ い た 船)	大 南	18
10	千 里 城	大 森 彦 七	千 里 (川 登)	19
<b>久 万 町</b>				
1	善 通 寺 お 霊 屋	幽 谷 上 人	畑 野 川	20
2	三 島 神 社	佃 十 成	宮 の 前	21
3	法 然 寺	佃 十 成	久 万	22
<b>松 山 市</b>				
1	日 招 八 幡 大 神 社	オ ト ヨ 石	保 免 中 1 丁 目	23
2	雄 郡 神 社	左 馬 殿 の 松 ・ 杉	小 栗 3 丁 目	24

3	松 前 町	商 人 移 住 地	松 前 町 1 ~ 5	25・26
4	岡 井 藤 志 郎 の 碑	松 山 城 濠	松 前 町 1 丁 目	27
5	松 山 城	筒 井 門 ・ 乾 櫓 ・ 城 石	丸 之 内	28
6	不 論 院	佃 十 成 の 墓	高 砂 町 3 丁 目	29
7	長 建 寺	佃 十 成 の 菩 提 寺	御 幸 1 丁 目 281	30
8	来 迎 寺	足 立 重 信 の 墓	御 幸 1 丁 目	31
9	宝 珠 院 常 福 寺	森 田 雷 死 久	平 田 町 4 5 0	32
10	石 手 寺	み か え り 桜 ( 明 成 )	石 手 2 丁 目	33
11	正 円 寺	正 木 城 の 楼 門 ・ 庭 石	正 円 寺 町 1 丁 目	34
12	刈 屋 畑 ・ 地 図	刈 屋 畑 の 戦 佃 十 成	古 三 津	35・36
13	如 来 院	如 来 院 の 戦	鷹 子	37
14	日 尾 八 幡 宮	黒 田 霊 社	鷹 子	38
15	荏 原 城 跡	平 岡 氏	恵 原 町	39
16	鍵 谷 カ ナ 記 念 堂	伊 予 緋 創 始 者	西 垣 生	40

### 重 信 町

1	浮 嶋 神 社	雨 乞 い ・ 加 藤 嘉 明	牛 淵 7 1 8	41
2	徳 威 三 島 神 社	御 面 渡 御 祭	北 野 20 - 12	42
3	水 天 宮	加 藤 嘉 明 ・ 足 立 重 信	横 河 原 樋 口	43

### 川 内 町

1	金 毘 羅 寺	加 藤 嘉 明 ・ 4 本 杉	河 之 内 音 田	44
2	雨 滝	雨 乞 踊 り	河 之 内 音 田	45

### 北 条 市

1	国 津 比 古 命 神 社	加 藤 嘉 明 ・ 八 脚 門	八 反 地	46
---	---------------	-----------------	-------	----

### 参 考 資 料

1	塩 売 街 道 ・ 地 図	塩 売 橋	塩 屋 ~ 巖 島 神 社 ( 三 津 )	48・49
2	大 洲 街 道 ・ 地 図	札 の 辻 よ り	札 の 辻 ~ 伊 予 市 堺	50・51
3	参 考 文 献			52
4	編 集 後 記			53



## 栄養寺 武知五友の墓

所在地 伊予市灘町4丁目



武知五友の墓

栄養寺本堂の北側を東進し、突き当たり少し北に武知五友の墓がある。墓碑に「旧松山藩臣清風武知先生墓」とある。

墓石の正面以外の三面に碑文が刻まれている。先生諱方字伯慮武知氏清風其號也に始まり、最後に

松山 近藤元弘 撰  
門人 三浦公凱 題額  
長井義毅 書  
親族門人等建立 とある。

武知五友

文化13年（1816）4月1日、松山藩士武知矩方（朴斎）の長男として生まれた。幼名は清太郎、号は五友、そのほか清風、海外、愛山、白痴ともいい、往来居士、五格などともいった。

幼兄より学問・武芸を好み、藩士近藤逸翁について素読を受けたが、逸翁の勧めにより、日下伯巖に師事した。

文政11年（1828）明教館（現在松山東高校内にある）に入学し、伯巖の指導を受けた。天保10年（1839）23歳の時江戸に出て昌平黌に入学した。

明治5年（1872）岡田村上高柳の荒神庵に住み、五松庵と名づけ、塾を開き子弟を教育した。正岡子規もここで学んだ。

明治15年（1882）郡中に移り、ここを永住の地と定めて灘町に私塾を開き（現黒住教会所）子弟を教育した。

明治25年（1892）12月歳晩、急に病を得て、天命の尽きたのを知り、絶命の詩を賦して翌明治26年1月3日没した。時に77歳であった。

郡中地区の人々は五友を敬慕するあまり、しきりに請うて郡中栄養寺に厚く埋葬し、菩提を弔うこととした。



# 光明寺 加藤唯明の墓碑

所在地 伊予市灘町海岸通り



光明寺

富泊山光明寺、真宗本願寺派、本尊は阿弥陀仏立像。創立天正3年（1575）亥の本堂に向かって左側に、高さ約2mの板状笠付の碑がある。これが加藤唯明の墓といわれている。

唯明は伊予国松山城主加藤左馬助嘉明の舎弟で、この寺の開基にして、慶長11年（1607）11月15日、本派本願寺第12世准如宗主により当山第2世正善に長福寺と寺号を賜る。

享保元年（1716）12月13日長福寺を光明寺と改める。

寛永13年（1636）郡中村松本の地より郡中町現在の地に寺を移した。

## 口碑伝説

郡中村旧寺域のある地点に深さ約1.5mの処に石室があって、開基の唯明の具足一領、その他の物があったと伝えられている。

当山第13世は一度発掘したが、腐朽が甚だしかったので再び埋めもどし、その後その地点の盗掘を恐れて表わさなかったという。



加藤唯明の墓碑（光明寺）

# 郡中巷衢創業誌碑 武知五友の撰文

所在地 伊予市灘町・五色浜



郡中巷衢創業誌碑 表面

五色浜神社の一の鳥居をくぐると、左手に高さ約6.9m、幅約1.8m、厚さ約90cmの大きな石碑がある。

明治18年（1885）郡中町の創始250年を記念して建てられたものである。

表面は、宇和島第7代藩主の伊達春山（むねただ宗紀）の書、裏面は漢学者山下清風

（武知五友）の撰文、書は俳人河東碧梧桐の父で、有名な書家河東こん坤（静溪）のものである。郡中町誕生のいきさつが書かれた貴重な碑文である。

## 碑の前の説明板

明治18年（1885）郡中の町づくり250年を記念して町有志が計画し、明治27年（1884）7月にやっと竣工した。

表面の「郡中巷衢創業原誌」の碑名は幕末に活躍した宇和島藩主伊達春山（むねただ宗紀）の書、裏面は漢学者山下清風（武知五友）が郡中町誕生のいきさつを述べ、先人の業績をたたえた美しい文で、俳人河東碧梧桐の父で有名な書家河東坤が書いた。

碑の高さ約4.3m、興居島で採った花崗岩である。



郡中巷衢創業誌碑 裏面

# 彩浜館 藩境の石

伊予市

所在地 伊予市灘町・五色浜



藩境の石

彩浜館の前庭北側に、「従是南大洲領」と刻まれた石柱が立っている。これは藩政時代の大洲藩と松山藩の境界石で、松前町と伊予市境の新川の豊円寺北隣り北野氏宅南東角道路端に在ったものである。

寛永12年(1635)松山藩の郡中地方と、大洲藩の風早地方との替地が行われたとき、建立されたものとみられる。

右横に中江藤樹の筆跡と書かれた標柱が立てられているが、定かでない。

## 境界石について

他藩との境界または郡界などには、その目印として木が植えられた。

木は枝や根がよく張る榎や松が選ばれたが、管理や補植等の手間から、寛保元年(1741)3月に立石に改められた。

その書跡は、一里塚は水谷文五郎他5名、郡境は荒井又五郎、領界石は伊藤浅右衛門である。

後年、水谷文五郎は「郡」の字の縦棒が2寸長すぎた。と悔やんだという。

中江藤樹は1608~1648の人で、上記からすると藤樹書というのは疑問である。



藩境の石のあった所

# 南邨鷺野先生碑

所在地 伊予市灘町、五色浜



南邨鷺野先生の碑

五色浜神社裏手の松林の中、グラウンドを見下す丘に「南邨鷺野先生碑」が立っている。高さ約2m、幅88cmの美しい碑である。

鷺野南邨は、文化2年（1805）7月25日、南黒田の庄屋梅三郎の長男として生まれた。母は三秋村庄屋得能良左衛門知通の娘タメ。

幼名は「富貴太」といい、長じて「落太郎」、青年時代に「松陰」と号したが、後「南邨」と改めた。

幼時から向学心強く、郡中の陶惟貞とともに宮内桂山に学び秀才のほまれ高く、陶惟貞とは親交を結び、研鑽に励んだ。

青年時代大阪に出て、篠崎小竹の私塾“梅花社”に入門し、塾頭を務めるまでになった。

のち、父梅三郎の病によって帰郷し、庄屋の職を継ぎ、かたわら私塾“橙黄園”を開いて多くの子弟を教育するとともに詩作と読書に励んだ。

南邨は明治10年（1877）7月7日、72歳で没したが、各方面に寄与した功績は、はかり知れないものがあった。

鷺野純夫在余塾也に始まり、先生の人となりや経歴がしるされているこの碑は、明治34年（1901）風詠社主、上高柳戸長武市英俊（蟠松の叔父）が主唱し、門弟一同で頌徳碑を建てたのがこの碑である。

碑の裏面に

明治34年6月

門人及親戚建之

主唱者 武市 英俊

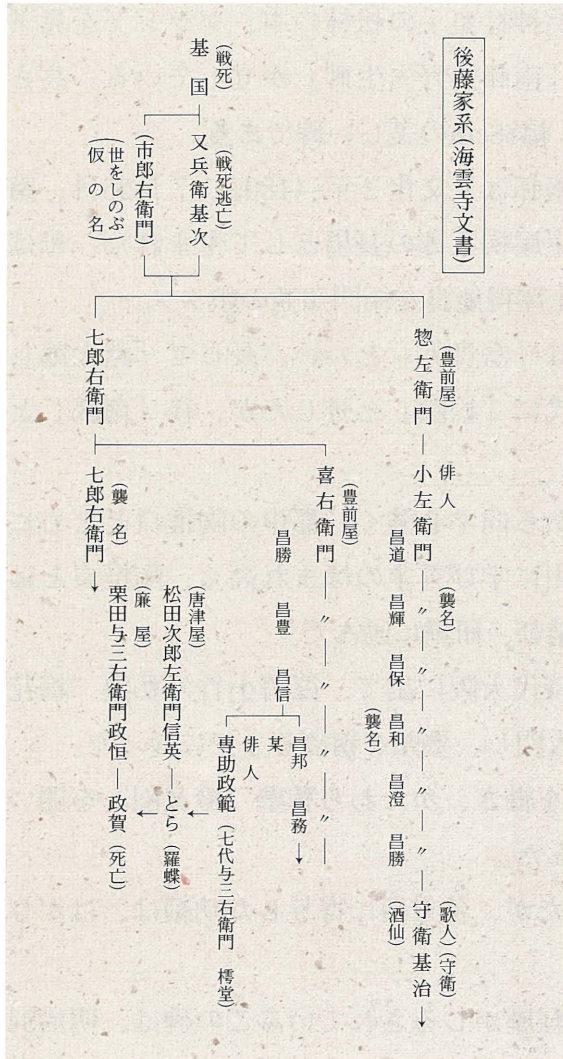
石工 松本佐五八

碑表の最後一列に

明治34年6月 浪華 南岳 藤澤 恒撰 平安 小林卓齋題額 山田得多書とある。

# 海雲寺 後藤氏系図

所在地 伊予市米湊本郷



後藤家系図

後藤又兵衛は、戦国時代播磨国（兵庫県）三木城主別所長治の臣後藤基国の子として生まれた。

黒田如水の家臣となり、その嗣子長政に従って幾度かの戦に参加し、数々の武功をたてた。

慶長19年（1614）大阪城へ入った。同年11月大阪冬の陣には、抜群の武勇を現したが、翌元和元年（1615）5月、大阪夏の陣に先手の大将となって出陣し、討死した。

松前地区では、又兵衛は戦死とみせかけ、実は旧友加藤嘉明をたよって松前地区に逃れて百姓となり、地域の開発に努力したと語り伝えられてきた。

筒井の大智院境内に二基の供養塔がある。これが後藤又兵衛夫妻の墳墓であると信じられてきた。

筒井地区に「後藤堰」または「後藤新田」等の古地名が残っていたためである。

大智院の位牌に次のとおりある。

足誉休心良宅居士 （又兵衛）

清誉果実妙因大姉 （夫人）

## 宝珠寺 彦七奉納の甲冑

所在地 伊予市上吾川（谷上山）

宝珠寺本堂：市指定文化財 昭和59.12.26



大森彦七奉納の甲冑（宝珠寺）

この寺の寺宝として、南北朝時代（1331～1391）の武将大森彦七が奉納したといわれる甲冑がある。

谷上山慈悲院、本尊は千手観音、真言宗智山派（もと大覚寺派）。

寺伝によると、この寺の信仰は山上（標高455m）にあった<sup>やこう</sup>弥光井（<sup>まな</sup>真名井）という霊井にあるらしい。

創建以来、度重なる造営を経たことが寺伝にみえる。幾多の転変を経て……

江戸時代加藤嘉明の造営を経て、この地の領主大洲藩主加藤泰恒による延宝4年（1676）の造営の功も空しく、文化10年（1813）の火災で焼失、その後同13年に復興したのが現在の庫裡で、他はその後のものという。

寺の境内には、本堂を始め薬師堂・絵馬堂・護摩堂・大師堂・通

夜堂・<sup>くり</sup>庫裡・鐘楼・一の門・二の門・仁王門が建ち並んでいる。

本堂の建築は特に精巧を極め、唐破風つき縫破風様式の入母屋造で、向拝（拝む正面）は軒唐破風つき折衷様だが斗組は詰組だから唐様式が強い。壮観な斗組である。

下三谷の川中夏吉が建築したものであって、市指定文化財になっている。

# 浜出稲荷神社 森田雷死久の句碑

所在地 伊予市上吾川本谷（唐川）



森田雷死久の句碑

浜出稲荷神社の境内に、“行く春を花に咲きにけり露の臺”<sup>とう</sup> 雷死久と刻まれた森田雷死久の句碑がある。

明治の中頃、浜出稲荷神社の近くにあった新成寺<sup>しんじょうじ</sup>の住職であった森田雷死久が、この寺を去るにあたり、村人たちに別れを告げて寺を出たが、また引き返して、「帰俗（僧をやめること）の辞」と題して、この句を寺の壁に書き残したものである。

碑の文字は、壁に書かれていたそのままの文字を刻んだといわれる。

実物の壁は切り取って、伊予市中央公民館に保管している。

雷死久は、現松前町西高柳に生まれ、幼少の頃から仏門に入った。河東碧梧桐に師事し、新

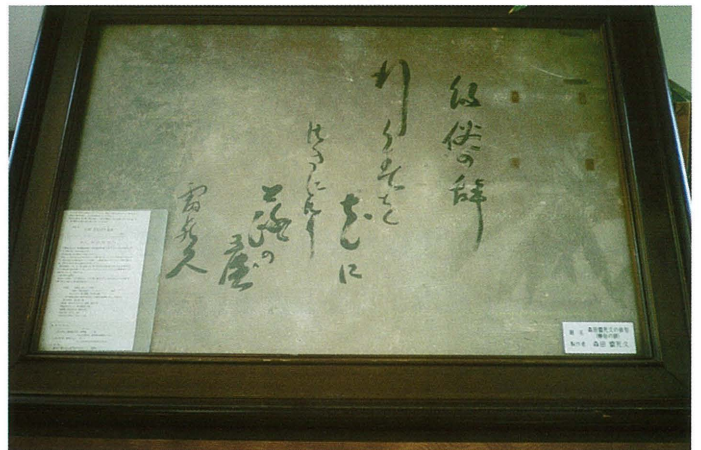
鮮な句を発表しているが、本格的に俳句に取り組んだのは、明治29年（1896）からである。

雷死久の号を使いはじめたのは、唐川時代からで、それは自句の「雷公の死して久しい早かな」から名づけたといわれる。

その後再び僧となり、温泉郡潮見村（現松山市平田町）の宝珠院に住し、伊予梨の栽培普及に努め、伊予果物組合を結成するなど、この方面の功績も大きかった。

大正3年（1914）、僅か43歳で世を去った。

伝説によると、例の矢取川事件の時、大森彦七が鬼女の片腕を斬り落とした小剣が不思議にも浜出稲荷神社に納まっていたという。



帰俗の辞

## 長泉寺 後藤又兵衛の墓碑

所在地 伊予市宮下南組

後藤又兵衛基次公菩提所：市指定文化財 昭和63.11.29



後藤又兵衛記念碑

宮下の真言宗智山派、京都智積院の末寺で本尊十一面観音（行基の作と伝えられる）の長泉寺境内に、後藤又兵衛の墓碑がある。

又兵衛は播磨（現兵庫県）の人で、『御替地古今集』によれば、「豊臣秀頼の臣後藤又兵衛が大阪落城後、当長泉寺住職の伯父を頼って伊予に渡った……」とある。

その後、又兵衛は宮下の伯父の家で相果てたという。また大阪夏の陣に豊臣方につき敗北し、元和元年（1615）5月6日早晩、道明寺で最後を遂げた。時に56歳であった。ともいわれており、この時首をはねたのは、従者の吉村武右衛門で、彼は首級を又兵衛の陣羽織に包み、『伊予古跡誌』にあるように、長泉寺を訪れたものとみられる。長泉寺は、昭和63年（1988）に「後藤又兵衛基次公菩提所」となった。

この寺の僧は、又兵衛の母方の伯父藤岡九兵衛であった。松前町にも又兵衛の伝説が残っているが、又兵衛が主人の黒田長政とのいさかいにより、福岡小隅城<sup>こぐま</sup>を出て、故郷の播磨へ帰る途中、伯父の居る長泉寺へ立ち寄ったとの風聞から、史実化されたものであろう。

寺の境内には、昭和40年10月17日に建てられた又兵衛の記念碑がある。

また、後藤又兵衛基次の墓が宮下の大塚和夫氏宅内（北西）にある。墓といわれるものは風化して形もくずれていて、墓碑銘もわからない。



又兵衛の墓



# 古樋井手（懸樋跡） 矢取川事件

所在地 砥部町八倉  
町指定文化財



古樋井手

懸樋とは、水を通すための竹や木の樋<sup>とい</sup>のことで、明和8年（1771）の水論争・矢取川事件はその発端がこの懸樋の水の取り扱いにあった。

上下両麻生は重信川から古樋井手で水田用水を引き入れ、下五ヶ村（八倉・宮之下・上

野・徳丸・出作）はこれと並行した一の井手を用水路とした。両水路は矢取川の下を抜けて交差し、古樋井手の水路は一の井手の上を懸樋で横切り、水を流した。

水不足のとき、重信川からの取水に不利な下5ヶ村は、古樋井手の懸樋のこぼれ水をもろうしか方法がなかった。この水利構造が水論争の種となったので、両者間にそれを防止する協定も作られたが、大早ばつの時はそれが守られず大騒動となった。

## 矢取川事件（明和水論）

明和8年（1771）の大早ばつで、関係農民の間に流血の大騒動となった。6月8日、八倉（大洲領）宮之下（天領）上野（天領）徳丸・出作（松山領）の下5ヶ村の農民約700人が古樋井手を切り落としたため、上麻生（大洲領）下麻生（新谷領）の両麻生勢約200名は市之井手を横に堰き上げ、水を残らず古樋井手へ堰き入れた。

それで、両者の乱闘となり、死者2名と多数の重傷者を出した。

天領から死者が出たことから、明和8年（1771）12月勘定奉行松平右近将監から、関係者を備中代官へ差し出すよう命ぜられた。

各村の庄屋・組頭・百姓代表など370余名が倉敷・笠岡に出頭した。

首謀者を詮議されたが名乗り出ず、両麻生村の者は、1年以上投獄の責苦にあった。審理の途中で、下麻生村組頭の窪田兵右衛門が発議者（首謀者）であると名のり出、安永3年（1774）2月23日、倉敷において判決があり、即日死罪執行で幕を閉じた。

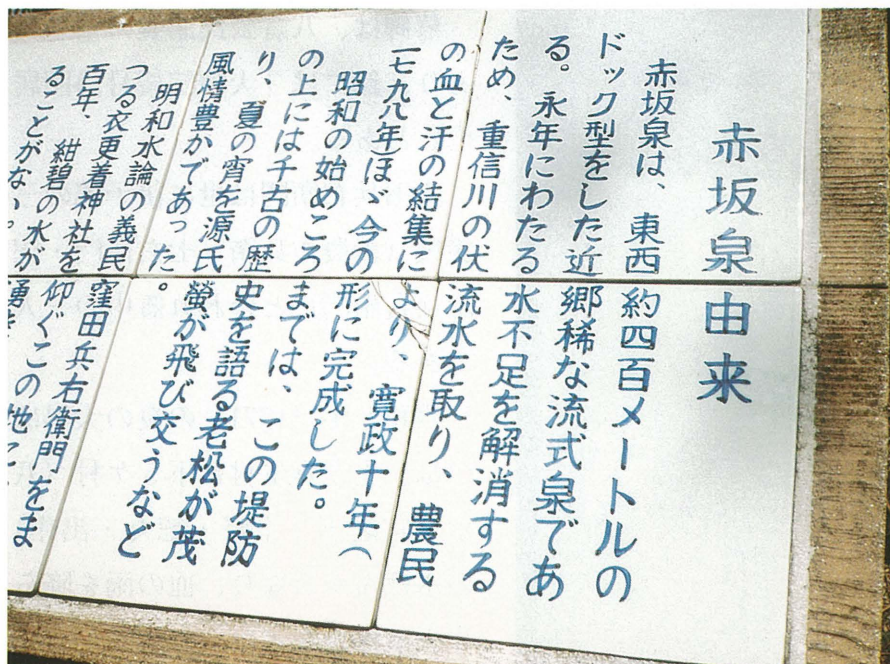


古樋井手

# 赤坂泉 矢取川事件

所在地 砥部町重光

砥部町



赤坂泉由来

赤坂泉は重信川左岸にあり、その伏流水を取り、別名鏡泉ともいう名水である。

明和8年(1771)の大旱ばつで、麻生と下5ヶ村の間に起こった水争いの矢取川事件は、義民下麻生村の組頭窪田兵右衛門が責を一身に引き受け、その処刑で幕を閉じる悲劇となった。

その後、永年にわたる水不足を解消するため、釣吉村(現上野)の庄屋阿部万左衛門が安永3年(1774)赤坂泉開さく工事の世話人となり、一の井手の開さく工事が始められた。万左衛門の献身的な働きによって、寛政10年(1798)ほぼ今の形に完成した。

この泉は東西約400mのドック型をした流泉式の泉で、重信川の伏流水を取り、これによって、八倉・宮下・上野・徳丸・出作等の水田用水として利用されている。

この泉は、特に水がきれいなため、夏にはホタルが飛び交うなど環境が大変よく、夏には子供の遊泳場・キャンプ場など野外活動の場として広く活用されている。現在は、赤坂桜づつみ公園として整備され、住民のやすらぎ、憩いの場となっている。



赤坂泉

## 八倉公民館 窪田兵右衛門の墓

所在地 砥部町八倉  
町指定文化財 昭和44.3.15



窪田兵右衛門の墓

墓碑は、八倉公民館裏の墓地にあり、銘には「大機院観月浄照居士」とある。

窪田兵右衛門は世に伊予郡の三義民（義農作兵衛・七右衛門・窪田兵右衛門）といわれる中の一人である。

明和8年（1771）の夏の大早ばつは、上下麻生村と下5ヶ村（八倉・宮之下・上野・徳丸・出作）の水げんかとなり、血の雨を降らす大事件となった。

南神崎（宮之下）、上野村が幕府領であったため、事件の裁判は幕府が直接笠岡（岡山県）で行った。4年の長きにわたっても首謀者が決まらず、多くの人々は困ばいその極に達した。

兵右衛門は母が病気であり、この争いには参加していなかったが、下麻生村の組頭であり、郷里

のことを考えるといたたまれず、一身を犠牲にして責を負って首謀者と名乗り、倉敷の刑場で処刑された。安永3年（1774）2月23日、35歳であった。

公民館の庭には、「窪田兵右衛門君碑銘」の頌徳碑と、辞世の句「如月のあわれたずねよ法の道」の碑がある。

# 衣更着神社・円通寺 窪田兵右衛門

所在地 衣更着神社 砥部町八倉  
円通寺 砥部町重光（拾町）

砥部町

## 衣更着神社

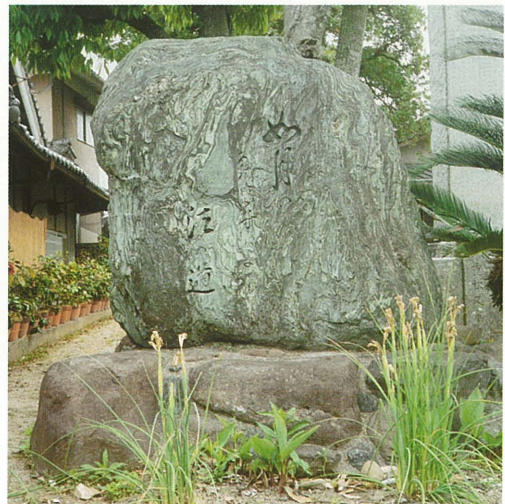
窪田兵右衛門をまつている。

社号は彼の辞世の句「如月のあわれたずねよ法の道」に由来するものである。

兵右衛門の義勇をたたえ、村人によって文政7年（1827）に建てられた。



衣更着神社

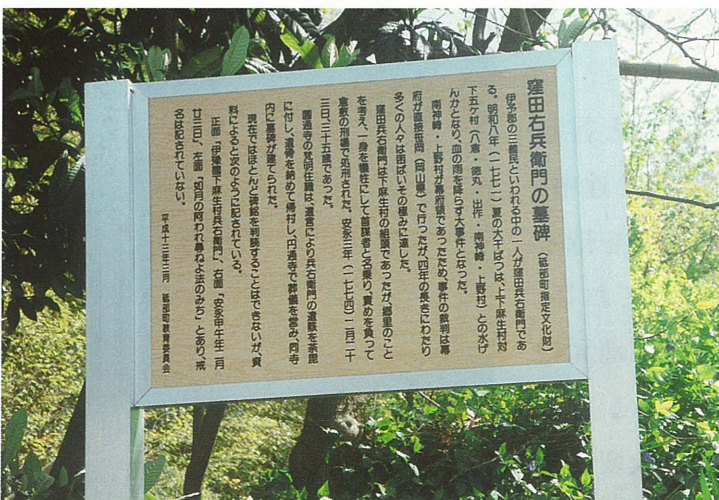


窪田兵右衛門辞世の句

## 円通寺 窪田兵右衛門の墓

山門前左側に窪田兵右衛門夫婦の墓がある。

兵右衛門の赦免を幕府に直訴し助命に尽力したこの寺の天倪和尚が、処刑された兵右衛門の遺骸を茶毘に付して持ち帰って、寺の境内に葬ったと伝えられている。



看板



窪田兵右衛門の墓

# 魔住が窪（地蔵堂） 大森彦七

所在地 砥部町重光  
町指定文化財 昭和57.9.30



地蔵堂全景

魔住が窪は、重光地区の藤の棚や地蔵堂のある地域をいい、大森彦七に関する遺跡の中でも代表的な所である。

ここは、伊予温故録に「麻生に在り、大洲日記に言う。大森彦七化物に出逢った所なり、今俗誤って茄子が久保という。又小金坂という所あり、鬼女の出で彦七の背に負われたる所なり。矢取川一に鏡川という。鬼女の形の川水に写り、鬼の姿と見えたるに因り鏡川ともいうなり」とある。

彦七は、湊川合戦で楠木正成を切腹させたと言われる人物で、松前町の金蓮寺へ猿樂を見に行く途中、矢取川において美女の姿をかりた鬼が、彦七を待ちうけていた所が魔住が窪であると伝えられており、地蔵堂には、彦七が襲われた場面を想像して地元の絵師、矢野翠堂が描いた絵馬が奉納されている。

初夏の頃には藤の花が一面に垂れ下がり大変見事で、憩いの場としても親しまれている。



絵馬

# 理正院楼門 加藤嘉明

所在地 砥部町麻生  
町指定文化財 昭和57.9.30

楼門は堂々たる威容を構え、入母屋造の屋根は見事なそりを見せて高くそびえ、下から見上げると、斗栱や臺股が調和よく組み合わされ、均整のとれた建造物であることがわかる。また、楼の彫刻は竹田番匠友弘の作りといわれている。

理正院は、大同2年（807）に空海上人が四国を伝導された際に、当時の国司散位越智宿祢實勝と相談して、堂宇を建て大日如来座像を安置し、東向山理正院有善寺と称された。

境内には本殿・奥殿・楼門・鐘楼など多くの堂宇が自然林にうまく配置されている。なお、この楼門は、焼失していたものを寛永元年（1624）5月に、松山城主加藤左馬助嘉明が再建したと伝えられている。

木造金剛力士像（町指定有形文化財 昭和57.9.30 指定）

桧の寄木造で、玉眼を用い、像高は2m、彫りが深く、がっしりとした力強さから鎌倉時代の作と思われる。

金剛力士は仁王とも呼ばれ、上半身は筋肉隆々たる半裸形で、下半身は裾衣をまとっている。口を開いている像が「阿形」<sup>あぎょう</sup>で口を閉じている像を「吽形」<sup>うんぎょう</sup>といい、五十音の最初の「ア」と最後の「ん」を表わしているのも、ものの最初と最後を表わしているといわれ、また、阿吽の呼吸を表わしているともいわれる。

加藤嘉明の嘉明の呼称について（ヨシアキラかヨシアキか？）

伊予史談会々長の影浦勉氏によると、古い読み方では「ヨシアキラ」現代の読み方では「ヨシアキ」で、松山地方では「ヨシアキラ」といっている。ところで中央では「ヨシアキ」といっているとのこと。

淡路の志知町に問い合わせたら、こちらのときは茂勝であったので、どちらとも言っていないとのこと。

ヨシアキラの呼称をしているもの

1. 加藤嘉明資料 西国寺源透編著（大正10年）
2. 伊予公論
3. 加藤嘉明公 昭和5年伊予史談会加藤家世代表

ヨシアキの呼称をしているもの

1. 加藤家御系譜 滋賀県水口図書館蔵及び寛政重修家譜



理正院楼門

# 宮内城山 大森彦七供養塔

所在地 砥部町宮内  
町指定文化財 昭和44.3.15



大森彦七の供養塔

太平記に記載のある大森彦七に関する代表的な遺跡の一つで、宮内城山の南麓にある。

塔身・台石からなり、正徳2年（1712）に田中権内により建立されたが、その後風化が激しく、また塔身は三つに折れていたものを補修している。

銘刻は正面に「長盛院殿大森彦七居士神儀」と誌されていたが、現在は判読もむずかしい状態に風化している。

塔身は縦・横各34cm、高さ91cm、上の台石は縦・横各52.5cm、下の台石は縦・横各66cm、高さ38cmである。

台石の銘刻も一部欠けているが、次のとおりになっている。

塔北面：「伊予浮穴郡砥部庄 滋田中氏権内居士 蓋爲先君故生敬慕之恩 勸群衆俱 戮力」

塔東面：「彦七昔日就干花園地建培以奉供養 請銘銘日超出六合 武勇大振 忠功正信」

塔西面：「声無不到 楠靈怪化守劍惱身 終縁仏乗 自他離塵 麻山嗣法沙門 南堂光書」

塔南面：「施主砥部麻生田中氏権内 大庄屋田中治兵衛等勸化 五本松小助 川井忠左衛門 正徳二壬辰臘月吉旦造立焉」〔正徳2年（1712）〕

# からつ船「<sup>いさば</sup>五十集」工藤窯

所在地 工藤窯跡 砥部町大南

砥部町



元工藤窯

陶磁器を積み、販路を遠隔地に求めて行商する帆船を松前地区では「からつ船」通称「五十集」または「わいた船」といった。

からつ船は、明治5年（1872）砥部焼のみを販売し、同13

年頃は、砥部焼産出陶磁器全量を松前のからつ船が各地に搬出した。

浜新立住吉神社には、砥部窯元全員が松前商人へ感謝の念をこめて、神社改修費を寄付した記念碑が建立されている。

陶器の製造・販売について、砥部町と松前町との関係は深い。砥部産出陶器は、全部松前港から「五十集」によって積み出されたし、松前の人が砥部の工藤窯を経営するなど、一時はきわめて密接な関係にあった。

その後、砥部だけのものだけでなく、尾張・美濃方面の陶磁器を積んで瀬戸内沿岸はもちろん、山陰・北陸・九州方面にも販路を開拓した。

明治末期、陶器問屋は40軒、からつ船は50隻、行商日数も3ヶ月～6ヶ月に及んで盛況をきわめた。

## 工藤窯（現松田氏）

明治7年（1874）大西某が小窯を築く  
明治10年（1877）浜本藤八氏が継ぎ、  
後、弟の工藤市太郎が登窯を築き  
繁栄

昭和28年（1953）廃業

現在跡地に松田哲夫氏の窯がある。



住吉神社



# 千里城跡 大森彦七

所在地 砥部町千里



宮内城山

千里城跡は、砥部川上流の千里山（城山）の頂上にあり、千里山は標高581mの山である。世梨とも施梨とも書き、また城里ともいう。

『予陽旧蹟温遊記』には世梨山とあり、保元・平治の乱のころ（1156～1159）には河野通清の弟新三郎通豊の居城、

また、元弘・建武のころ（1331～1335）には大森次郎左衛門盛清やその子彦七盛長の居城であった。と記されている。

千里城が有名になったのは、その城主が太平記に出てくる大森彦七であったからである。彦七は河野氏の旗下で、楠正成に腹を切らせた武将である。

彦七の主河野通盛は北朝方で、兵を兵庫に集め、湊川の合戦で正成を攻め、彦七はついに正成を討ちとったのである。

城のあった所は、想像をこえる山奥であり、頂上はけわしくない。どうしてこの山奥の不便な所を選んで築城したか理解に苦しむ面もあるが、常にはそのふもとの五本松に居を構え、一朝有事の際にこの城にたてこもったのであろう。

頂上の城跡は、南北わずか40数m、東西90mばかりの平坦地になっており、東西には空濠があったという。西側にはその跡がわずかに残っている。

そしてそこから南北に通じる通路のあとがある。また、山の中腹（南麓）には、中通り・上所・下所・寺屋敷・茶屋・備中屋敷などの地名が残っており、城主彦七や重臣たちの居館はこのあたりにあったのでは、そして城が華やかであった頃の遠い昔をしのばせてくれる。

彦七は文明11年（1479）に荏原の平岡氏のために亡ぼされた。その平岡下総守は千里城にこもって、主家の河野に反旗をひるがえしたのである。

その後のことは何もわからないが、秀吉の四国平定後も、松山の湯築城壬生川の城など伊予十城の一つとして千里城は残されている。

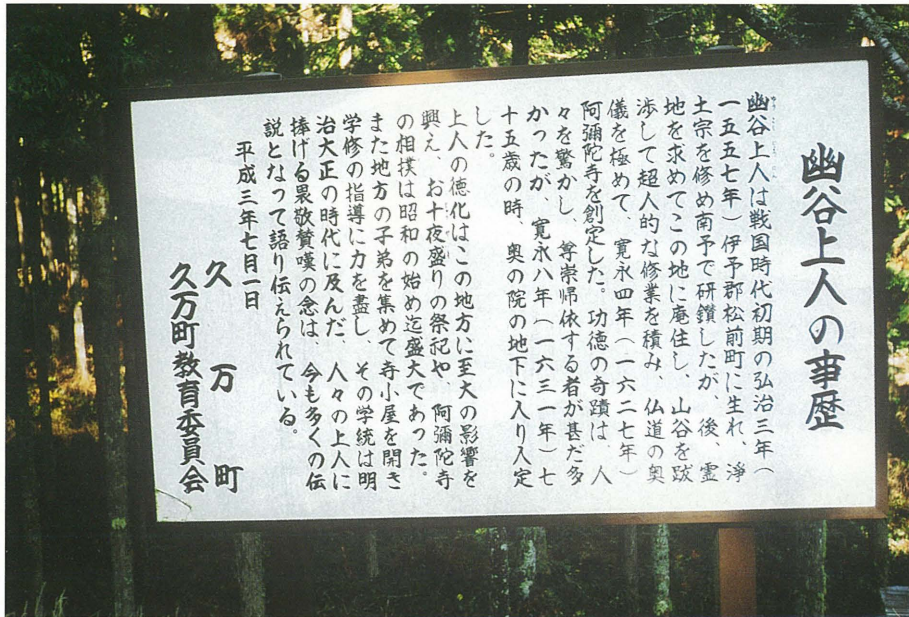
廢城となったのは、徳川時代のいわゆる一国一城の令の時であった。



千里城跡

# 善通寺お霊屋 幽谷上人

所在地 久万町下畑野川  
町指定文化財 昭和47.6.23



幽谷上人の事歴

幽谷上人は、伊予郡松前町の生まれで、浄土宗を修行した後、霊地を求めて久万山まちむらに登り、久万町村の法然寺にしばらく滞在していたが、その後、下畑野川に来て庵を建て、村民に教えを広めた。

そのため、畑野川では、禅宗から浄土

宗に宗旨変えをするものが多くなり、この地に阿弥陀寺を建てた。

また、その修法は、浄土宗に禅宗を取り入れた独特の行法であり、弟子もとらずひたすら仏の道をきわめ、ついに寛永8年（1631）11月、自ら阿弥陀寺奥の院の地下を掘ってそこに入定した。

村人たちは、地面にひざまづいて、地の底からかすかに聞こえる鐘の音を、21日間聞き続けたという。

上人入定の後、奥の院は「お霊屋」といってあがめられ、はだし参り以外は禁じられていた。

その後、寺は無住となり、上田組の人が管理していたが、大正15年（1926）荒れはてていた寺をこわし、本尊安置の建物を設けた。

お祭りは12月1日で、町主催で催されている。



霊廟

# 三島神社 佃十成

所在地 久万町管生宮の前  
町指定・県指定 昭和34.7.1



三島神社

三島神社は慶長8年（1603）松前藩主加藤嘉明の重臣佃十成によって再建された。

神社は久万町管生宮の前に鎮座している。この建物は間口9.84m、奥行き11.4mの入母屋造りである。

貞享年間（1684～1697）に修理し、また昭和36年（1961）6月から大修理に着工。翌37年6月に竣工した。

この時、藁葺き屋根は銅板葺きに、また、外部の柱はほとんど替えたが、内部の柱・虹梁・欄間・斗組・墓股・化粧檼等は昔のままである。

慶長時代（1596～1614）の構造様式がそこなわれず保存されており、特に斗栱・欄間等はいわゆる桃山時代（1594頃）の高尚・雄渾な面影を残している。

また、銅板葺きの屋根の上部には「折敷三文字」の家紋が入れている。これは、源平の争乱において、河野通信が第三番目の武功を認められた（源頼朝によって）ところから、河野家の家紋となったものである。

三島神社を氏神として、大野氏は河野家の流れをくむところから、この紋がつけられているのであろう。

夏祭りは7月22日である。

# 法然寺 佃十成

所在地 久万町久万62番地

久万町



法然寺

「伊予温古録」によると、久万山城主大野家の香華院<sup>こうげいん</sup>として、慶長年間（1596～1614）に加藤嘉明の家老佃十成が建立したものとなっている。

お寺の過去帳は、明暦2年（1656）のものからである。度重なる大火のため、それ以前の記録が焼失し、誰れの創建が本当なのか調査する資料がないのである。

いずれにしても、現在の山門は江戸時代の度重なる大火にも耐え、類焼をまぬがれたものを現在地へ移転したものと伝えられている。  
法然寺

浄土宗知恩院派に属している。山号は口称院万徳山<sup>くしょういん</sup>、本尊は阿弥陀如来である。

建久2年（1191）法然が勅勘をこうむり土佐に配流されたが、実際は、弟子の瑞連が身代わりとなり、やがて許されて京に帰る途中、ここ久万町にとどまり、念仏を広めた。その因縁によって承元2年（1207）同町入野に堂が建立され、法然寺と称するようになったという。

建立当時は、現在の伊予銀行久万支店とその周辺を境内としたようであるが、度重なる久万町の大火に類焼し、山ノ内仰西が世話人となり、天和2年（1682）の春、現在地へ移転改築したものと伝えられている。

# 日招八幡大神社 オトヨ石

所在地 松山市保免中1丁目



日招八幡大神社

日招八幡大神社は、保免に鎮座し、崇徳天皇2年（1829）の創立で、祭神は市旃島姫命・湍津姫命・田心姫命外2柱の命である。

社格は郷社、保免及び市坪の氏神である。  
オトヨ石：慶長7年（1602）加藤嘉明が松前城を要害の地松山に移すに当たり、領内の町人、百姓はことごとく人夫に狩り出され、松

前から松山まで6 km余りの道を延々長蛇の列をつくって築城用の石材等を連日にわたって運んだ。

その大勢の人夫の中に「売魚婦<sup>おたた</sup>」も多数かかわった。

この時の売魚婦連中が頭上に石を乗せて運んだ働きは目覚ましく、大きな役割を果たした。

領主はいたくその功績を賞し、この桶を「御用桶」と名付け「おたた」の行商は後々まで無税にされた。

日招八幡大神社の拝殿右側にある高さ約80cm、幅約70cm、厚さ約40cmの花崗岩があり、前面と側面に「⊖」の刻印がある。この石は重さ約307kgで、古来、松前の「トヨ」というオタタが松前城より運んできたものだといわれ、これと同じ刻印のある石が松山城にも使われている。現在11個確認されている。

一説に、毎日石運びに精出すオタタの中に「於豊<sup>おとよ</sup>」と呼ぶ10人力に余る力持ちの女丈夫がいた。「於豊<sup>おとよ</sup>」は平家の落人と言われ、親の仇を捜し求めて、松前城下に巡り着き、売魚婦に身をやつして暮らしていたが、狩り出されて築城の石運びに加わっていた。

ある日のこと、大きな石を頭に頂いて、出合の渡しを渡り、余戸の郷から保免に出て、日招神社の境内で石を下ろして休憩していた。

そこへ目指す仇とおぼしき男が見つかったと、注進して来た者があった。於豊は石をその場に置いたまま急いで松前に取って返し、首尾よく本懐を遂げたといわれている。

また、神社の立札にはこれとは別の「松山むかし話」が記載されている。



城石

# 雄郡神社 左馬殿の松

所在地 松山市小栗1丁目

市指定文化財 昭和37.11.5 指定・昭和59.1.13 解除



雄郡神社

## 雄郡神社

用明天皇の元年(586)創建という。宇佐八幡を勧請したといい、品陀和氣命ほか10柱の神々を祀っている。

関が原の役するとき、河野の遺臣らがおそって、社殿宝物などを焼いたので昔日の面影を失った。

## 左馬殿の松

松山城を築城した加藤嘉明の手植えの松と伝えられ、根まわり8.5m、目通り周囲4.5m、樹高50m、樹齢380年といわれる樹相整然とした名木であった。

落雷のため枯れ、現在根株と二世の松がそばに植え育っている。

西側の方にある杉も嘉明が植えたものと伝えられている。

## 嘉明お手植えの杉

境内入ってすぐ左手(北側)に加藤嘉明お手植えの杉といわれる杉が数本ある。

## 加藤嘉明

嘉明は永禄6年(1563)三河(愛知県)永良郷に、岸三之丞教明(加藤教明)の長子として生まれた。幼名を孫六、本名を茂勝(志知城時代)諱は嘉明、後左馬助といった。

21歳で賤ヶ嶽の戦に加わり、「七本槍」の一人として勇名を馳せた。

24歳のとき、淡路志知城主一万五千石となる。

文禄4年(1595)33歳で松前城主6万石を領し、朝鮮の役の戦功により10万石となる。

関が原の戦いで戦功により20万石に加増され、慶長7年(1602)松山築城に着手し、翌8年松山城に移った。

以来24年間、松山城地の経営に力を注いだ。

寛永4年(1627)会津若松40万石に転封となる。

寛永8年(1631)9月12日、江戸桜田の邸で69歳で死去した。



左馬殿の松

# まち 松前町



松前町

## 松前町

松山城下町のなかにつくられた松前町<sup>まち</sup>は、かつて松前に在住していた御用商人を中心として、古町が目抜き通りとして形成された町並であって、商家が軒を連ねて盛況を呈した。

町役（役高）においても松前町は、古町分30町の中でも非常に格式が高く、栗田（廉屋）・後藤（豊前屋）・曾我部（八蔵屋）らの豪商がこれに当たった。

なお、古町の元禄時代町名と現町名の関係は次の通りである。

北松前町（現松前町3丁目）・中松前町（現松前町3丁目）・松前半町（現松前町2丁目）・南松前町（現松前町2丁目）また、山越に寺町が形成された。

## 寺町（松山市山越）

松山城築城とともに、城主加藤嘉明は城下町の建設をはじめ、侍屋敷・町屋・社等の地割を行ない、城の北側の御幸山麓（山越）に多くの寺を集めて寺町を形成したが、一朝あるときには、城砦の役目をさせようとした。現在くずれているが、千秋寺の土壁には敵を防ぐための銃眼があった。

# 松前から移転した寺

所在地 松山市



得法寺

## 慈光山得法寺（萱町4-2-3）

真宗 開山僧名法恵法師 創立沿革等不詳、開基順恵法師は約700年前の人で、三津浜の浪人であったが、後出家して諸国修業中に越後の国で新鸞上人の弟子となり、6代目興念法師の時、予州道後に得法寺を建立した。現御堂は興念時代のもの。

その後、勝山城が出来ると共に現地を貸代され今日に至っている。

## 法泉寺（松前町4-6-2）

清流山 灌生院 真宗大谷派 創立  
慶長8年（1603）10月

元は真言宗で持田村に在って、河野家の菩提寺であった。後松前村に移転した。慶長8年（1603）加藤嘉明の建立によって現今の地に移る。時に住僧道鎮（嘉明の伯父）、東本願寺一世門跡教如に帰依し真宗となった。嘉明書状があるという。



法泉寺

## 天徳寺（御幸町265番地）

加藤嘉明松山に封ぜられるに及んで寺門の再興をはかり南源を請して開山した。



天徳寺



## 松前から移転した寺（その2）

所在地 松山市



浄蓮寺

浄蓮寺（本町4-9-2）北尾山、真宗西本願寺派、本尊阿弥陀如来

創立享禄4年（1531）10月27日、  
当時は元三輪宗で温泉郡湯之町に  
あって、河野道直の創立にかかる。  
その後、伊予郡松前町に移し、住  
職善了代に現在の所に移転した。  
開基は河野家の末葉と伝えられる  
が不詳である。

大法寺（本町5-4）日蓮宗 本尊十界  
の大曼荼羅

由緒：天文3年（1534）の創建と  
伝えられる。

慶長8年（1603）加藤嘉明が松前  
の筒井から松山へ移封の際、これに  
伴い松山の山越へ移転した。明治初  
年更に現地に移った。

昭和20年の戦災で焼失し、現建物  
は戦後の再建。



大法寺



正明寺

正明寺（萱町4-3-3）真宗本願寺派

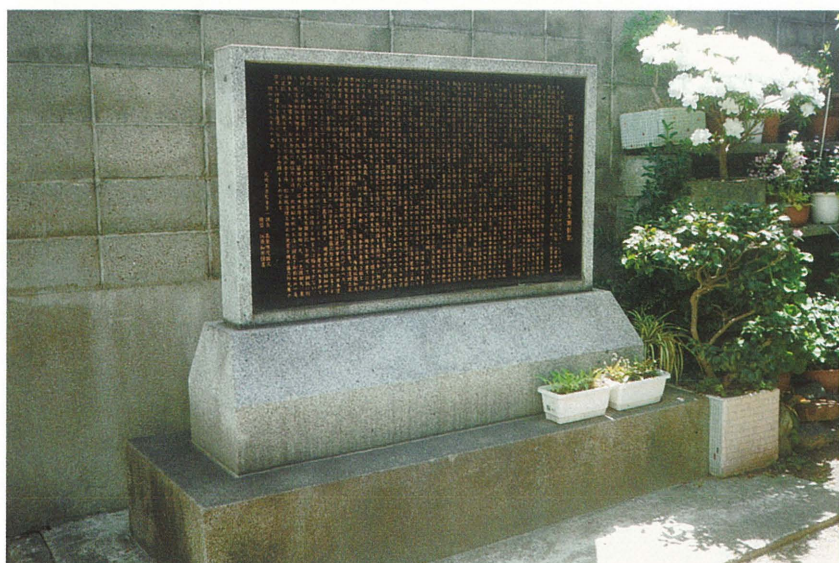
創立慶長15年3月28日

開山 僧 宗圓

沿革その他不詳

# 岡井藤志郎の碑

所在地 松山市松前町1丁目



岡井藤志郎先生顕彰碑

松山市松前町1丁目、元  
税務署（現駐車場）の北西  
隅に岡井藤志郎先生顕彰記  
の碑がある。

岡井氏は南黒田出身の元  
横浜地方裁判所判事・衆議  
院議員・弁護士で、昭和24  
年8月、松山城の濠を埋め  
立ての危機から救った最大  
の功労者である。

昭和23年秋、愛媛軍政部

司令官シアルス中佐は「お濠が不潔だから埋め立てよ」と安井雅一松山市長に命令した。

岡井氏は決死の覚悟で司令官に面会して、文化財と灌漑用水源の保護を述べ、埋め立て命令の撤回を訴えた。

話し合いは難航したが、ついに司令官も中止を了承した。

これによって、城濠の埋め立ては阻止され、今日のお濠があるわけである。

## 松山城濠の大恩人 岡井藤志郎先生顕彰記

中国には「水を使う人は井戸を掘った人の労苦に感謝しなければならない」という諺がある。……にはじまり 以て戦後史に輝く不滅の金字塔、松山城濠埋立阻止の史実と岡井藤志郎先生の偉大な功績とを後昆に伝えようと念願するものである。

昭和60年8月19日

元埼玉県監査第一課長 高麗博茂こま撰文  
稜岱 江袋和男謹書

と、ある。

この碑は、埼玉県高麗博茂氏が、岡井藤志郎氏の長男の敏氏が著した「東條弾劾一戦時下、首相を糾弾したある判事の生涯」これを読んで感動して松山市にも働きかけて建てられたものである。

# 松山城 筒井門・乾櫓・城石

所在地 松山市丸之内

## 松山城

加藤嘉明が関が原の戦功により加増され、20万石の大名となったが、正木（松前）の地が支配地として適さなくなったため、他に築城の候補地を物色した結果、道後平野の中心地にあたる勝山に決定し、幕府の許可を得ると、家臣の足立半右衛門重信を普請奉行に任命し、慶長7年（1602）城郭および城下町の建設に着手した。

嘉明は慶長8年（1603）未完成だが新城に移った。

松山城は勝山（海拔132m）に天守閣を設けた連立式平山城である。嘉明のときは五層の天守だったが、のち松平定行の時三層に改築された。



松山城



乾櫓

乾櫓 国指定重要文化財 昭和10.5.13

現在の乾櫓は、陰門と一緒に築城、松前城からここに移転建築されたもので、一番古い建物である。

短折隅櫓二層一部一層：屋根入母屋造り本瓦葺、本丸から乾櫓の方向に当たるところに建てられているのでこの名がある。

北郭に通ずる乾門、その東を固める東続櫓とともに<sup>からめて</sup>搦手を防衛する重要な構えである。内部構造は木割大きく、床は拭板張り、壁は太鼓壁玉石詰め、天井はなく化粧屋根裏になっているなど、豪放で素朴な手法から慶長創建とうかがえる。



筒井門

筒井門

松山築城に際し正木城（松前城）から移されたものである。

本丸大平の正面の固めを構成した脇門付の櫓門である。

昭和10年国宝に指定されたが、昭和24年（1949）2月、精神異常者の放火で惜しくも焼けてしまい、同42～43年に石垣の修理を行ない、同46年3月20日、古い資料に基づいて櫓門を復元した。



城石

## 城石

正木城から運ばれた「☉」の刻印のある城石が、二の丸庭園駐車場南側等の石垣に見られる。現在11個確認されている。

# 不諭院 佃十成の墓

所在地 松山市高砂町3丁目



不諭院

佃十成は天文22年（1553）三河（現愛知県）生まれで、加藤嘉明の重臣（筆頭家老）。通称次郎兵衛・秀吉の小田原攻めから朝鮮出兵まで、主君加藤嘉明に従って苦労を共にした。

慶長5年（1600）の関が原戦には嘉明従軍のため、留守の松前城を加藤内記（嘉明の弟）らと守り、これを奪取しようとして三津に上陸した穴戸景好・村上元吉らを将とする中国の毛利輝元勢25,000人を夜襲して

撃退し、これに呼応して荏原・風早地方に蜂起した一揆を掃討して事なきを得た。

関が原から帰還した嘉明はその功を賞し、久万山6000石の知行所を与えた。

また、松山入城に際しては、北郭を本邸として与えられた。これを俗に「<sup>きたくるわ</sup>佃廓」<sup>つくだくるわ</sup>とも「高石垣」（高さ4間=7.27m）とも呼ばれた。

ほかに清水町に中屋敷・山越に下屋敷があり、特に下屋敷には花卉・名木を植え建築は善美を尽くしたため、「さても見事な次郎兵衛の屋形、四方白壁八棟造り、阿波にござらぬ讃岐に見えぬ、まして土佐には及びはないぞ、伊予に一つの花の家」と歌われた。

そのためか、久万山への課役はきびしく、屋敷に人夫を日参勤務させた。

庄屋代表は困窮の状を領主嘉明に直訴し、次郎兵衛は隠居して、一子三郎兵衛が久万山知行所を相続したが、1年で嘉明が会津に国替えとなり、佃一家もこれに従って会津に移住した。寛永4年（1627）である。禄1万石を与えられた。

寛永11年（1634）82歳で世を去った。



佃十成の墓

# 長建寺 佃十成の菩提寺

所在地 松山市御幸1丁目281  
県指定文化財 昭和26.11.27



長建寺

天正11年（1583）開山、真誉了吟〔慶長12年（1607）死去〕により、伊予郡松前町に開創。加藤嘉明の松山城築城とともに同城下木屋町2丁目付近に移建、重臣佃十成の菩提寺となり、後、現在地に移った。

浄土宗で、広度山誓応院と号し、本尊は阿弥陀如来。

「御領分寺院」延享5年（1748）によると、建久9年（1198）鎮西派聖光<sup>しょうこう</sup>が当地に布教したときに創建ということであるが明らかでない。

「松山藩寺院録」〔弘化2年（1845）〕によると、公儀支配で末寺8か寺とあり、「明細帳」〔明治5年（1872）〕には中本寺とあるから、江戸以来栄えていたことがわかる。

浄土宗の名僧学信は、当時15世であったが、藩公に請われて、安永4年（1775）その菩提寺大林寺へ移った。

16世鸞<sup>らんせき</sup>碩も徳のある人であった。寛文年中（1661～1672）に造った庭園は今もよく保存され、スケールは小さいが、松山における数少ない名園の一つである。

# 来迎寺 足立重信の墓

所在地 松山市御幸1丁目  
県指定文化財 昭和26.11.27



来迎寺

足立重信は正木城・松山城主加藤嘉明の重臣で、その墓は彼の遺言によって、松山城を望む城北の地、来迎寺の丘上にある。

墓碑の高さ224cm、花崗岩で造られた五輪塔である。

重信は永禄6年（1563）ころ美濃国（岐阜県）に生まれた。天正年間（1573～1592）に加藤嘉明に仕え、文禄4年（1595）嘉明が文禄の役の功により、淡路国志知城主から伊予国正木

（松前）城主に転封されたのに伴って伊予に在住した。

慶長3年（1598）重信は命をうけて伊予川（現重信川）の改修を行い、正木城の洪水防止に成功するとともに、新しく5千町歩の耕地を生み出した。

重信は現在の松前町上高柳千代152番地に8年間住んでいたといわれ、当時ここで重信川改修について、周到精密に実施踏査を繰り返したものと思われる。

慶長5年（1600）関が原の戦功で20万石の大名となった嘉明は、勝山築城と城下町の建設を計画し、重信に普請奉行を命じた。

着工より20数年、未完の城に心を残しつつ、寛永2年（1626）西堀端の邸で病没した。

墓は五輪で献燈が2基ある。脚にゆかりの俳句が刻んであるのが珍しい。

“功や三百年の水も春” 鳴雪（右）

“宝川伊予川の秋の出水哉 霽月（左）

（重信の300回忌に重信川の石で造ったという。）



足立重信の墓

# 宝珠院常福寺 森田雷死久

所在地 松山市平田町



宝珠院常福寺

俳人森田雷死久が住職を務め、大正3年（1914）6月8日息を引きとった寺である。

森田雷死久は明治3年（1872）松前町西高柳の森田弥市郎の2男として生まれた。本名は愛五郎、僧籍に入って「貫了」俳号を初めは鶯痴、のち雷死久といった。

「雷公の死して久しき早かな」という句を激称されて号としたという。

12歳で僧籍に入り、温泉郡中島の長隆寺にはいったが、先輩に一宿仏海がいて、すでに子規と交友関係があったことも俳句入門の要因と考えられる。

伊予市谷上山宝珠寺にのぼり、学徳ともに高く、横田僧正と称えられた。

権田雷斧に師事したことも雷死久の人間形成に大きな力となったと思われる。

以後、伊予市唐川の真成寺、和気の太山寺、高音寺、松山市平田町の常福寺の住職を務めるかわら、句作と俳諧研究と果樹（梨研究）栽培指導に没頭した。



森田雷死久の墓

# 石手寺 加藤明成 「みかえり桜」

所在地 松山市石手2丁目  
市指定文化財 昭和38.11.1



石手寺楼門

## みかえり桜

松山城主加藤嘉明の子、明成が石手寺を訪れ花見をした時、帰途さらにこの桜を振り返り、激賞したことからこの名がついたという。「みかえり桜」は本州中部以西にはえるウバヒガンの一変種で、イトザクラという。枝が垂れ下がるのが特長である。

根まわり1.9m、樹高6m、枝張り12m余、四方に張り出した枝は、無数の小枝を垂下して糸状になる枝垂れ桜（シダレザクラ）である。

花はソメイヨシノに先だって咲き、普通4月初めに盛期となる。

色はうす桃色で、その枝垂れの姿はまことに優美である。

## 加藤明成<sup>あきなり</sup>

文禄1年（1592）生まれ、寛文1年（1661）2月20日死去。

江戸初期の大名、陸奥国会津藩（福島県）藩主。父は嘉明。通称孫次郎。

寛永8年（1631）父の遺領会津40万石を継ぐ、同16年（1639）会津若松城の大改修を行った。

この年、家臣堀主水<sup>もんど</sup>の出奔事件が起こり、堀は幕府に明成の苛政を訴えた。明成は堀を処罰してから、寛永20年（1643）病気を理由に会津40万石の返上を幕府に願い出て許された。

子の明友には石見国（島根県）吉永に1万石が与えられた。吉永で死去。



みかえり桜



# 正円寺 正木城の山門・庭石

所在地 松山市正円寺1丁目



正円寺の門

山門と庭石（3個）は、正木城から松山城に移る時、移されたものという。

山門は立派なもので、これに使われている金具などは、松山城のものと同じである。

その当時はまだ寺ではなくて庵だったらしい。

貞享年間（1684～1687）に松平左内が隠居し、正円寺庵と名づけて観世音を念じた。その後、石手寺最勝院の末寺、隠居寺となり、現在は総本山長谷寺の末寺である。本尊は十一面観音である。

町名の由来となる正円寺は、松山三十三観音のひとつで17番に当たる。



庭石

# 刈屋畑(口)の戦い 佃十成

所在地 松山市古三津

慶長5年(1600)石田三成は徳川を討とうと……関が原の戦がおこる。正木城主加藤嘉明は軍を率いて徳川方に従い関が原に出向いた。(東軍側)

そこで、お家再興と領地奪回をねらっていた河野氏の遺臣たち、芸州広島城主毛利輝元(石田方であったが)の臣、宍戸善左衛門、村上掃部元吉、曾根兵庫、能島内匠頭を将として、正木城を襲わせた。

慶長5年(1600)9月18日、毛利軍(西軍側)は、兵船百余艘・2000余の兵士で(三津浜)興居島に上陸した。

村上元吉は直ちに軍使を正木城に派遣して、城の明け渡



村上大神



若宮様

しを迫った。留守を守っていたのは、家老佃十成以下のわずかな兵士であった。

時に、松前の城代佃十成は謀をもって、わざと小勢で寄せかけたので、安芸勢は佃の計略に陥り、松前は小勢と侮り、三津浜に上陸して陣をかまえた。河野氏の旧臣平岡善兵衛らも同調した。

佃十成は農民に酒を持たせ、河野家の兵たちを慰問させた。河野家の兵士たちは前祝いとばかり酒宴をはった。

佃十成はひそかに兵を率い合言葉を定め、9月18日の夜に乗じて三津に押し寄せ各地に火を放ち、大軍が襲ったように見せ、少ない兵士で攻めたてた。

毛利勢は酒宴で不意をくらい、大勢の武将や兵士がこの刈屋の地で討死した。

毛利勢の三将である村上元吉、能島内匠頭、曾根兵庫は壮絶な死をとげたのである。これが歴史に残る有名な「刈屋畑の合戦」である。また伊予の関が原合戦ともいわれている。



城主さん

# 刈屋畑(口)の戦 (その2)

所在地 松山市古三津1・2丁目

お塚さん(祠)

刈屋畑の大激戦で戦死した武将や名もない兵士の霊をなぐさめるため、地元人たちが祠をまつり続けている。

戦場となった刈屋畑をはじめ、三津一円に祠が散在している。

町の人には「村上さん」「若宮さん」「能登さん」「曾根さん」「加藤さん」などと親しみを込めて塚の名を呼んでいる。



地図は、国土地理院発行の2万5千分の1図を使用しました。

刈屋畑地図

村上大神(村上さん)

古三津旧遍路道より少し入り込んだ所に、鳥居のある小さな祠がある。これは、村上備中守元吉の祠で、村上大神と呼ばれている。

刈屋畑の合戦で、毛利軍の要の大將役をしていたのが、村上備中守元吉である。村上系図に、元吉は慶長5年(1600)9月18日、三津浜刈屋口にて討死、48歳とある。

## 古三津のお塚さん

地図番号	お塚さんの名	内容	場所
①	村上大神(村上さん)	村上備中守元吉の祠	古三津1丁目6の37
②	能登さん	能登但馬守他	古三津1-8-23畑中貞夫氏宅
③	長袖様	能徳明神 <small>のうとく</small>	同1丁目16の5三原忠雄氏宅
④	城主さん	能島内匠頭源吉忠	同1丁目15の23岡田晃一氏宅
⑤	若宮様		同2丁目11の10付近
⑥	阿部さん・橋本さん		同2丁目12の畑の中
⑦	御津大明神 <small>おんつ</small>	元屋敷跡	同2丁目17の32岡田忠夫氏宅
⑧	曾根さん	曾根兵庫介高房の祠	同1丁目16の17岩城宏光氏宅
⑨	加藤さん	加藤遠江守長康の祠	同1丁目18の28立石末広氏宅

# 如来院の戦 佃十成外

所在地 松山市鷹子



如来院

三津刈屋畑の戦で生き残った毛利軍の兵は久米へ逃げ、如来院にたてこもった。佃十成も兵を進めてこれを攻めた。その軍の中に黒田九兵衛がいたが、人々よりもまっ先に進み、如来院へ来て門を破って攻め入った。その勢は鬼のようであったという。

毛利軍を援助する土民軍（当時の和気郡の

人達）が鉄砲をうち始め、その有様は雨霰のようであったという。

黒田九兵衛は少しも恐れず門の中へ討ち入り、毛利兵を次々に討ち取ったが、ついに鉄砲弾が当たり命を落とした。

この黒田に続いて、飛松平介が門へ入った。佃十成は兵を東西に分けて攻め入り、芸州軍を破った。逃げる者を追い、討ち取った首は数知れずといわれる。

久米戦<sup>いくさ</sup>というのは、この如来院の戦のことである。

なおこの時、荏原に一揆がおこり芸州軍に志を通じた。その時、剛なる者があったもので、竹村源介という武士がただ一人で、馬に鞭うって荏原へかけつけ、槍をかまえ路にまたがり、眼を怒らし、一揆の者達を睨みつけた。その声は雷のようであった。一揆はその竹村の勇猛に恐れをなし、悉く逃げ去ったという。

如来院

如来院は、今の横河原線と日尾八幡社の鳥居との中間あたりに山門があり、堀がめぐらせてあったものと伝えられる。

慶長5年（1600）の如来院の戦（久米戦<sup>いくさ</sup>）の際、伽藍はすっかり焼失した。

# 日尾八幡宮 黒田霊社

所在地 松山市鷹子894

## 黒田霊社

日尾八幡宮の石段の中程西側にある祠である。

慶長5年(1600)久米如来院の戦があった。(如来院の戦参照)正木藩の豪勇の士黒田九兵衛はこの戦に奮戦、勇名を馳せたが遂に戦死した。

戦の後で里人はその死を惜しみ、斃<sup>たお</sup>れた所に祠を建てその霊を祭った。その祠は日尾八幡宮と伊予鉄横河原線との中間あたり、県道の東側であったという。後にそこより東方約150mほどの所へ移されたが、更に日尾八幡境内末社として、現在地に移社、祭られたものである。

江戸時代の古くから「黒田塚」とか「黒田さん」とか呼ばれて、里人に親しまれ、ことに熱病や痔になやむ時は、この塚にお詣りして線香や花を供え、必ずなると伝えられている。

現在、この黒田霊社の祠には「奈良原神社」の札がつけられている。黒田社と奈良原社と合祀されたものであろうか。

## 奈良原神社

奈良原神社本社は越智郡玉川町奈良原山に在る。奈良原山は櫛原山とも書き、海拔1040mの山である。越智郡蒼社川の水源となっている。高縄半島の最高の山であって、古来霊山とあがめられた所である。

この山頂に奈良原神社があり、伊邪那岐命・大山久意神・宇気母知神と共に長慶天皇が祭られている。

昔は牛馬の守護神として広く県下農民の信仰を集め(久米地区からも)農家の人は年に1度はお参りをし、お札を受けて帰る神社であった。

## 日尾八幡宮

慶長8年(1603)加藤嘉明が正木(松前)城から松山入城の際に、新しく築かれた城の固めとして、城の四方に八幡社を選び8社八幡を定められ、武運長久を祈願せられたが、久米八幡もその一社と定められた。

松平(久松)氏松山移封後も、また藩主の崇敬厚く、修築等が度々行われた。

なお、書家米山家が宮司を務める神社である。米山は宮司三輪田清敏の長男で常貞で米山と号した。



黒田塚

# 荏原城跡 平岡氏

所在地 松山市恵原町  
県指定文化財 昭和25.10.10



荏原城跡

## 荏原城跡

恵原の平坦地に築かれた中世の平城遺跡で、恵原城・会原城・棚居城・平岡城などの別名がある。

築城の年代は不明であるが、建武2年(1335)から同3年にかけて、忽那氏が「会原城」で戦った記録が「忽那一族軍忠次第」にある。

戦国時代末期、河野氏の重臣平岡氏の居城となり、土佐からの侵入を防ぐ拠点であったが、天正13年(1585)豊臣秀吉の四国統一により、湯月城主河野通直がその軍門に降り、荏原城も平岡通倚<sup>みちより</sup>を最後の城主として廃城となった。

城跡は方形の平地で、高さ5mほどの土塁を周囲に築き、その外側に堀をめぐらせている。堀の幅は、北側20m、西と東は14m、南は10mで、長さは東西130m、南北120mである。土塁の内側に居館が構築されていたものと思われるが、現在は畑山林となっている。

南西の隅に櫓か何かを建てたらしく石積の跡が残っている。

## 平若左近<sup>ひらわかさこん</sup> (平岡大和守通房入道左近房実)

平若左近は荏原城主平岡遠江守通倚の子で、平岡大和守通房入道左近房実である。左近は慶長5年(1600)9月に毛利輝元に一味として、松前城を攻め、三谷村(現伊予市三谷)で合戦、敗走し出作の音地やぶにさしかかった時、追っ手に囲まれ懸命に戦ったがついに討たれてしまった。追っ手の者は「主なき畜生め」といって左近の乗っていた馬の首を切り落とした。

左近の亡骸は家来7名が現二名神社西方に埋葬し、その墓前で家来7名が自刃した。

ところがそれから不思議なことが起こりはじめた。毎晩、人の寝静まった頃に、「シャン・シャン・シャン」という変な鈴の音が聞こえるようになった。

そこで土地の人は、供養のお念仏を唱えることになった。この念仏を始めてから不思議なことにバツタリと止んだ。

出作の恵依弥<sup>えひめ</sup>二名神社境内西側に供養塔がある。

# 鍵谷カナ記念堂・墓

所在地 垣生町（今出）



鍵谷カナ記念堂

伊予絣の創始者鍵谷カナは伊予郡垣生村大字今出（現松山市垣生町）の農家・鍵谷清吉の女として天明2年（1782）に生まれた。

カナ女は幼少の頃から器用で、裁縫など得意であったという。長じて小野山藤八と結婚し、夫と共に讃岐の金刀比羅宮に参詣し、帰りの船の中に乗合客の久留米人が絣（久

留米絣）の着物を着ているのを見て、その模様や、自分の家の藁屋根を葺き替えた時、すす竹の斑紋からヒントを得て、白糸の所々を糸屑などに括り、葉の青汁に浸し、絞って横飛白を織り上げた。享和3年（1803）のことである。

享和2年（1802）菊屋新助（現波方町の人）が松山に出て、松前町2丁目に菊屋を開き、従来の地機（いざり機）を改良し、高機が作られ、絣が量産された。

カナはなおも研究を重ね、弘化元年（1844）藍汁に染めて、いわゆる芥飛白を高機で織るようになった。なおも工夫をこらし、十の字・井筒の絣もでき始めた。世上からこれを今出絣と呼ばれた。次いで松山絣、あるいは伊予絣と称するようになった。

鍵谷カナ女は元治元年（1864）5月28日没す。83歳。毎年5月28日に鍵谷カナ祭が行われ、子供相撲大会などが盛大に催されている。

鍵谷カナの記念堂と頌功碑は昭和4年（1929）に造られた。

カナの墓は西垣生の長楽寺の境内（門を入れてすぐ左側）にある。過去帳はその菩提寺である松前町筒井の善正寺にもある。



鍵谷カナの墓

# 浮嶋神社 加藤嘉明・雨乞三面

所在地 重信町牛渕



浮嶋神社

## 浮嶋神社

この神社は遠い昔、この地の豪族が<sup>うましあし</sup>宇麻志阿斯<sup>かびひこじ</sup>詞備比古遲大神をまつり、浮嶋上神とよんだのが始まりといわれ、古代の石斧がご神体である。

三代実録によると、貞観9年（867）2月に神位従五位下が贈られ、六国史所戴の古社として広く尊崇された。

天正年中（1573～1591）

に兵火にあい、社殿古記録とも焼失したが、古代ゆかしい菖蒲祭や鎌倉・室町時代の雨乞い三面（徳威神宮と共有）をまつり、さらに南北朝時代の長慶天皇御陵の参考地もあり、由緒ある古社である。

慶長年間（1596～1614）加藤嘉明により社殿再建。三島宮と称し、菖蒲祭の古式を復旧。次の藩主久松家も、当社を藩の祈願所、雨乞い所として尊崇した。

享保年中（1716～1735）神主源朝臣相原宗数は、古来の浮嶋神の祭祀を復旧、享保8年（1723）祈願祭に霊験があつて、代官より鳥居の奉献があり、文政元年（1818）には諸郡代官本殿を改築した。

毎年10月7日の大祭には、「おねりの行事」が古式ゆたかに行われ参拝者も多い。昭和20年代（1945）には、この神社の近くから千基の古墳が発掘された。

雨乞い御面については、徳威三島宮のところに記載している。



雨乞三面



# 徳威三島宮 御面雨乞

所在地 重信町大字北野田字北野



徳威三島宮

寛文8年（1668）大早<sup>かん</sup>ばつがおこり、久米・浮穴両郡代官の支配のもと雨乞い祈願祭を齋行した。世にこれを「寛文の御面雨乞い」といっている。

元禄11年（1689）野田三島宮相原宗俊祠職を辞して、宗易神主家を継ぎ、宗好権神主家を起す。（以後明治中期までに社家は2家あり。）

享保17年（1732）5月寺社奉行の定番により「三神面」を野田・牛瀨両社の隔年鎮座とした。以後毎年12月20日に「御面渡御祭」を行う。

## 雨乞い御面（神面三面）

推古天皇21年（614）伊予の国司越智益躬<sup>ますみ</sup>公が、大三嶋大明神をお祭りして舞楽を奉納していた時、はるか海上の沖に小舟が一艘現われた。

調べてみると舟の中には人影もなく、一個の箱があり、その中に入っていたのが前ページの写真の三個の御面であったという。

益躬公は大三嶋大明神様が舞楽を大変お喜びになり、そのお礼に下さったものに違いないといって、そのお面を神社の御神体として奉納され、それが今に伝えられているのだという。

# 水天宮 加藤嘉明・足立重信

所在地 重信町大字横河原



水天宮

祭神：天之御中主大神・高御座巢日神・神産巢日神・安徳天皇・加藤嘉明命・足立重信命

由緒：社伝によれば、横河原は重信川の上流水激突の地にあたり、堤防しばしば決潰のため、地方民心安らぐ日はなく、ここにおいて水災は人工をもっては防ぎ得ず、神威の守護によるほかはないと官民相謀り、久留米の筑後河畔に鎮座する水天宮を勧請し、水難守護、防災の鎮守神とした。とある。

勧請年代は詳かではないが、250年以前と伝えられている。

その後、水害とみに減じ、農民安堵して業を励むに至り、洪水の節当社の守札をたてれば必ず靈驗あるを以て、古来より崇敬篤しと伝えられる。

戦後、現宮司和田久雄の提唱で、重信川を大改修した加藤嘉明公ならびに功労者足立重信公の霊が合祀され、今日に至っている。



水天宮由緒

# 金毘羅寺四本杉 加藤嘉明

所在地 川内町河之内音田  
町指定文化財 昭和49.1.23



金毘羅寺

金毘羅寺境内にある四本杉の大杉は、藩主加藤嘉明手植えの杉と伝えられている。高さ39m余り、目通り3.7m、3.3m、3.3m、3.5mの4本で、樹齢約360年といわれている。

この4本の杉は、嘉永7年（1854）境内整備のために石垣を積み上げた際に、根本が埋められたということである。

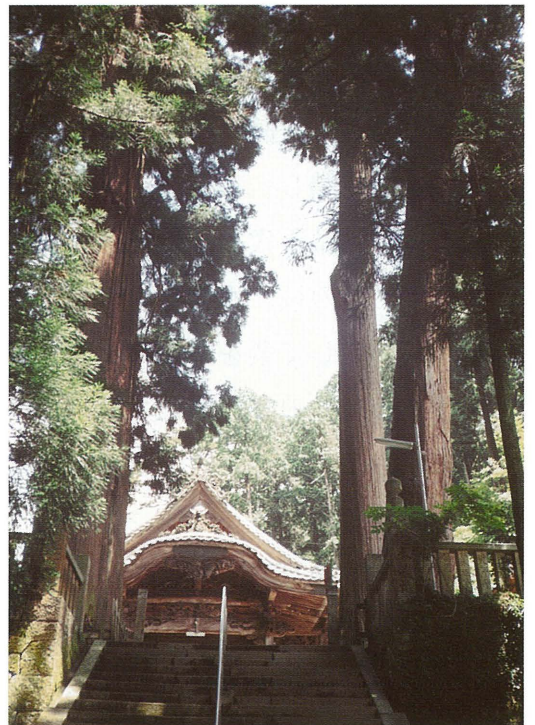
県道からすぐに石段を上って山門をくぐり、鐘楼・庫裏などを右に見ながら、次々に五か所の石段を登ると、本堂前のひときわ高い石垣の上、参道の左右にそれぞれ2本、天を摩するようにそびえ立っている。

その梢、3～4mは落雷によるものか白骨化しているが、今もなお旺盛な樹勢を保っている。

どっしりとした老杉の姿は、境内の森にいっそう荘厳さを与え、訪ねる人の心に迫るものがある。

金毘羅寺は、寺伝によると長寛年間（1163頃）の創立で称名寺と称したが、慶長年間（1596～1614）に金毘羅降臨の<sup>きずい</sup>奇瑞があったとして、金毘羅寺と改称したということである。

この寺は、中世の古城跡（<sup>なえつ</sup>名越城）の麓、恵まれた自然の中に大小の伽藍を置き、かつては遠近より参詣する善男善女でにぎわっていたところである。



四本杉

# 雨滝 雨乞い踊

所在地 川内町河之内音田



雨滝

雨滝は表川の上流、河之内音田にあり、懸崖絶壁になっていて淀んで深淵である。早魃の時、ここで松前地区の雨乞い踊の「御面映し」の行事が行われた所である。

松前地区の雨乞い踊は、「御面雨乞い」といわれ、藩政時代、代官行事として行われた。

重信町の浮嶋神社と、徳威三島宮が共有する「神面三面」を奉じて、2夜3日祭典を行い降雨を祈り、神面を奉じて松前に向かうのである。

松前の浜に着くと「御面」を仮宮に安置し、潮水を汲んで奉祀を行う。

最後に松前のおたたさんも加わり、「御本城御用」の赤絹ののぼりを先頭に「お面」と松前の海で汲んだ「潮水」を奉持して、川内町の雨滝に向かうのである。

雨滝に着くと、「御面映し」の行事として海水を雨滝に投入し、龍神（水神）を怒らせて雨を乞うものであった。松山藩における最大の雨乞い儀式であった。

神面三面は毎年12月20日に行われる「御面渡御祭」により、隔年で牛淵浮嶋神社野田三島神社に交互に鎮座されている。

おたたさんがなぜ雨乞い奉仕を行ってきたのか、直接的な背景は藩政時代の「御面雨乞い」供養したことに由来すると考えられている。

## イスノキの群生

景勝の地雨滝の岩場の上に、一抱もあるイスノキが群生している。イスノキは葉や枝に虫こぶができる。虫こぶの大きいものは4cmくらいになるものもある。

虫の出た穴に口を当てて吹くと「ヒョウ、ヒョウ」と鳴るところから、「ひよんの木」の名がある。



看板

# 国津比古命神社の八脚門 加藤嘉明

所在地 北条市八反地西原  
県指定文化財 昭和26.11.27



国津比古命神社

この八脚門（楼門）は慶安2年（1649）5月15日、松山市阿沼美神社に建立されたものを、元禄年間（1688～1703）にこの地に移した。ただし、慶長10年（1605）加藤嘉明によって、阿沼美神社に建立されたという説もある。

その後、寛政9年（1797）8月、明治35年（1892）3月、昭和48年（1973）に修繕されたものである。

建築様式は一部唐様を取り入れた和様建築で、入母屋造りの本瓦葺き、柱はいずれも円柱を使っている。

虹梁（こうりょう杜寺建築のときに使われる特別な形や技法をこらした梁）の構造や、かえるまた けた蟬股（桁と桁の間にある支えの下方をむいて蟬の股を開いたように広がった木）などの彫刻に創建当初の桃山建築や彫刻の雄大で豪華な面影を残している。

しかし、入口の上の虹梁は後で改造したことが明らかであり、その他の部分にも、後で補修したと思われる所が各部分にみられる。

また、蟬股の内側の動物、植物の彫刻等は、三百数十年の風雪を経てぜい弱になっている。

秋祭即ち風早祭の代表は八反地国津比古命神社の祭礼である。10月10・11日で各地区ごとに1～2台の輿型のダンヂリを備え、半鐘と太鼓で賑やかにかくので、「火事祭」の異名がある。



八脚門

---

## 参 考 资 料

---

## 「塩売街道」(塩の道)

「塩屋」はその名のように塩を焼いた場所で、古昔の塩田の所在地であった。

江戸時代は入浜式塩田であったが、中世は揚浜式であったといわれている。また、筒井(現江川団地の西方)の海岸にも塩田があったという。

ここで造られた塩は、松前のおたたさんが三津へ売りに行ったといわれている。その通り道を「塩売街道」とか「塩の道」といわれている。

岡田小学校東側の道を北に進み、(大洲街道逆進行)重信川堤防を上ると、出合渡し場跡の標柱が見える。そこから川を渡り、北岸の出合荘の西を北に下ると、「右松山道 左自動車道」の道標がある。そこを北進して久米垣生線(県道190号)を越え、余戸中3丁目をなおも北進する。

善喜寺の東の道を北進して久米垣生線を越えて進むと、森昌敏氏宅に突き当たる。そこを左折して約100mの所に戒能氏宅西側の道を北に行くと、さくら小学校がある。学校正門から約100m北に洗地川にかかる①塩売橋に来る。ここから北は富久町である。真直ぐ約600m北進すると、四叉路の南西隅に②地蔵がある。ここには目通り幹回り180cmのセンダンの木があり、ここでおたたさんが一休みした所だという。

ここを左折して約100m西に行くと小川がある。小川に沿って北に進む。

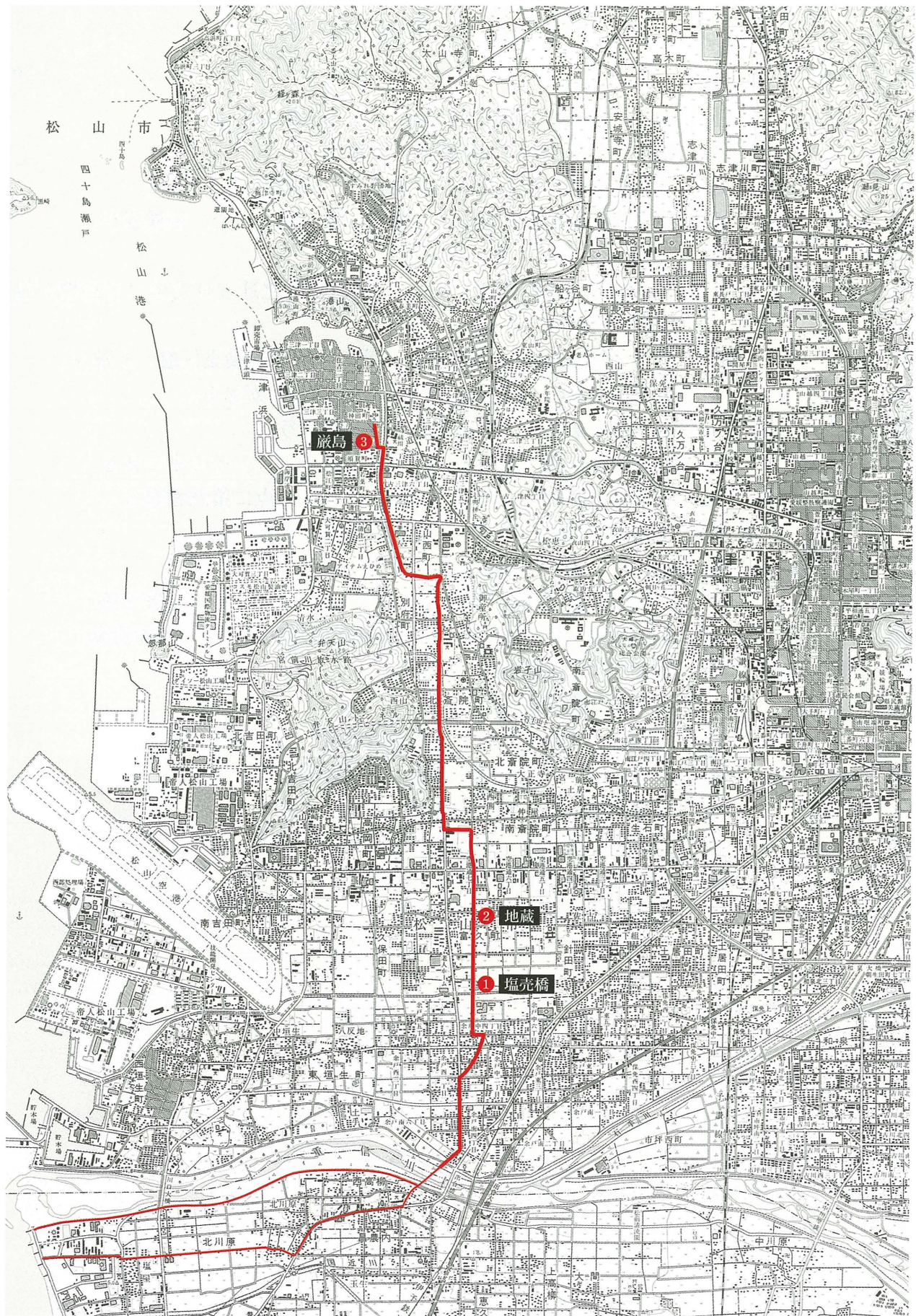
パチンコニュータイセイ・空港ホテルの東の道を北に進むと川の所に着く。

ブライダルホール・サントピアンの北側を西に行き、砥部伊予松山線(県道219号)に交わる。この道を真直ぐ北に600m程行くと道は少しカーブを描く、約100m行くと中津公園の西入口にさしかかる。なおも北進すると宮前川の金比羅橋に着く。

松山空港線(県道18号)を北に越え、宮前川沿いに北へ行く。宮前川が二つに分かれる所の三十六橋を渡って、味生小学校西側の道をぐんぐん北に進むと、新田学園プール(別府町)の所で宮前川を左折(西に向かう)川の北の道を西に進み、右折して宮前川の東を北進する。済生会松山病院の西を北進し、砥部伊予松山線(県道219号)と交差する所の三本柳橋にさしかかる。

松山西郵便局前を通過して国道437号を過ぎ宮前小学校南西のかとうベーカリーの西、須賀橋を渡って斜め西よりの道を北に行くと③巖島神社に着く。

ここは昔、市が開かれたところである。

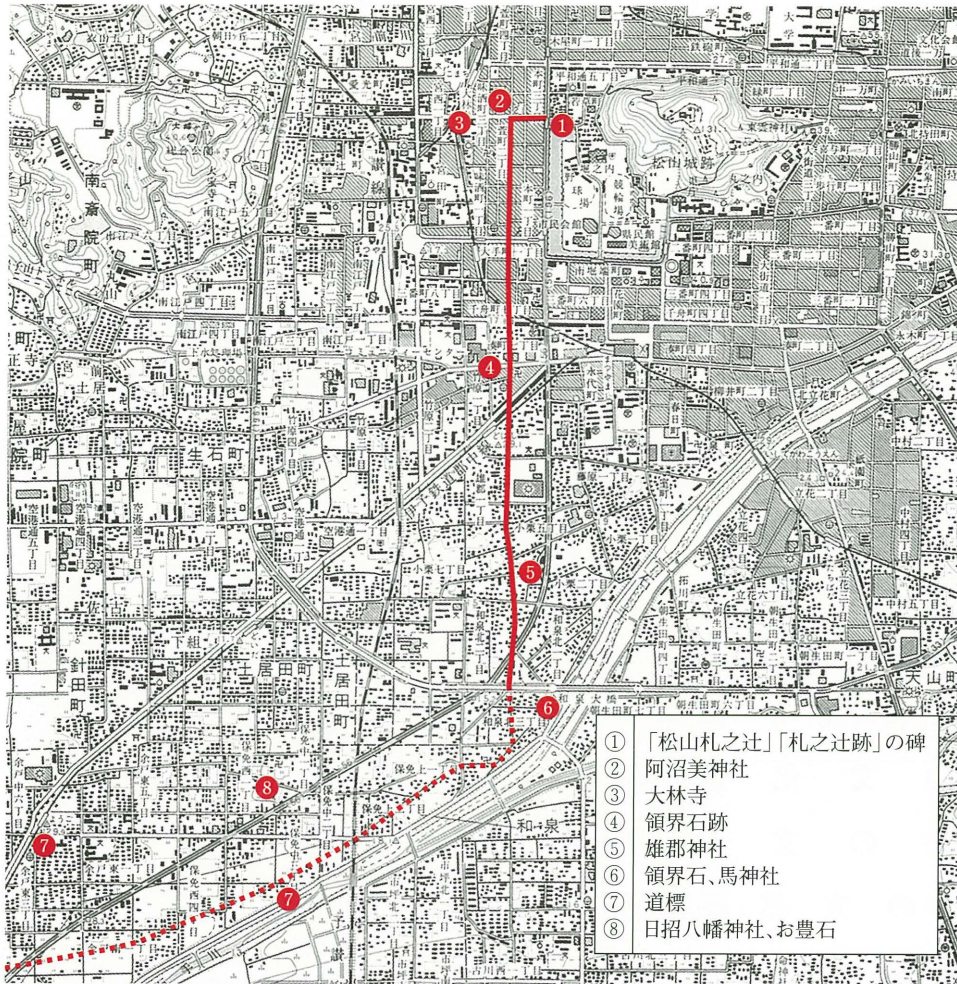


地図は、国土地理院発行の2万5千分の1図を使用しました。



## 大洲街道（中山町まで）

札	の	辻	藩政時代、松山藩の高札場であった場所である。
萱		町	札の辻から西に進み萱町を南下する。
土		橋	中の川土橋のたもとに「従是松山」の領界石があった。
雄	郡	神社	加藤嘉明お手植えの松「左馬殿の松」があった。根株現存。
日	招	八幡大神社	「おとよ石」㊦の城石がある。
一	里	木	日招神社参道南端所にあった。「松山札之辻より壱里」の道標が現在余戸支所前にある。
余	戸	南	旧大洲街道が100m程残存。地元の人「参勤交代道」と呼ぶ。
出		合	道標「出合渡し 札の辻より一里十四丁」がある。
岡	田	小学校	学校東の道を南に進むと旧56号に出合う。
薬	師	堂	旧56号線を西に行くと、昌農内墓地があり、その中にある。
三	十	三観音	旧56号と岡田中前の道を西進して交叉地点に第23番観音
玉	生	八幡大神社	鳥居前に「札の辻より二里」の道標がある。
西	古	泉	ひびけし様の四叉路を右折する。
筒		井	高市慶丈氏宅庭北東隅に常夜燈がある。西隣りが徳善寺跡。
札		場	向井氏宅（筒井708番地）藩政時代の高札場、その東が殿藏。
矢	野	地蔵	門柱石が堂東道路上にある。
大	念	寺	寺の前の道を南下する。
夫	婦	橋	橋の南三叉路の所に「あらわれ地蔵」が祀られている。
藩	境	の石	伊予市界に「従是南大洲領」の藩境の石があった。
大	師	堂	市指定文化財江山焼の金剛力士像がある。
庚	申	堂	福見山法昌寺で、俗に庚申堂といっている。金毘羅宮がある。
道		標	JR踏切の手前に「右カミナダ三リ ナガハマセリ」の道標。
茶	堂	・供養堂	稲荷地区。安永6年（1777）に建てられた供養堂がある。
道		標	三叉路に「左金毘羅道」「右谷上山道」の道標。
道		標	「金毘羅大門より三十二リ」
常	夜燈	・一字一石塔	弘文2年（1845）の常夜燈。寛政5年（1793）の一字一石塔。
一	里	木跡	市場の大道寺には中世風の石地蔵がある。
閻	魔	堂	山麓に太平曾根の閻魔堂と地蔵堂がある。
茶	屋	跡	石原の集落の中に五輪の塔が集められている。
地	蔵	堂	集落名（大地蔵）のもととなった地蔵堂。
一	里	木松跡	大南と中山町の境界あたりにある。
茶	屋	跡	長谷の茶屋跡。
一	里	木松跡	・大師堂 一般に犬寄峠といわれている処にある。



地図は、国土地理院発行の2万5千分の1図を使用しました。

## 参 考 文 献

- |                                   |                |                                |
|-----------------------------------|----------------|--------------------------------|
| 愛 媛 の 文 化 財                       | 平成 5 年 (1993)  | 県教育委員会文化財保護課編集                 |
| ふるさとのこみち中予編                       | 昭和55年 (1980)   | 県教育委員会事務局文化課                   |
| 愛 媛 県 の 歴 史 散 歩                   | (1973)         | 愛媛県高等学校教育研究会社会部会               |
| 伊 予 の 古 刹 ・ 名 刹                   | 平成 2 年 (1977)  | 越智 通敏著 愛媛県文化振興財団               |
| 四 国 の 古 城                         | 昭和49年 (1974)   | 山田 竹系 (株) 四国毎日広告社              |
| 愛 媛 大 百 科 辞 典                     | 昭和60年 (1985)   | 編集・発行 愛媛新聞社                    |
| 伊 予 市 探 訪                         | 平成 5 年 (1993)  | 伊予市歴史文化の会 〃                    |
| と べ 文 化 五 十 選                     | 昭和59年 (1984)   | 砥 部 町 〃                        |
| 砥 部 の 文 化 財                       | 平成 4 年 (1992)  | 砥部町教育委員会 〃                     |
| 伊 予 路 の 文 化                       | 昭和50年 (1975)   | 松山市教育委員会 (社会教育課)               |
| 松 山 市 の 文 化 財                     | 昭和55年 (1980)   | 松山市教育委員会編 松山市文化財協会             |
| 久 米 郷 土 誌                         | 平成 4 年 (1992)  | 久米郷土誌編集委員会 久米公民館               |
| 伊予水軍の港と歴史と文化とBA2<br>三津界限はええとこぞなもし | 平成 8 年 (1996)  | 山野 芳幸 アサヒ出版                    |
| 北 条 市 の 文 化 財                     | 昭和59年 (1984)   | 北条市教育委員会                       |
| ふるさどこみちしげのぶ                       | 昭和55年 (1980)   | ふるさどこみちしげのぶ編集委員会<br>重信町教育委員会発行 |
| 川 内 町 の 文 化 財                     | 昭和59年 (1984)   | 川内町教育委員会                       |
| 松 前 町 誌                           | 昭和54年          | 松前町誌編集委員会 発行松前町役場              |
| 久 米 郷 土 誌                         | 平成 4 年 3 月10日  | 久米郷土誌編集委員会 久米公民館               |
| 松 山 市 誌                           | 平成 7 年 5 月 1 日 | 松山市史編集委員 松山市役所                 |
| 重 信 町 誌                           | 昭和63年 3 月20日   | 重信町誌編集委員会 温泉郡重信町               |
| 川 内 町 誌                           | 平成 4 年 3 月 1 日 | 川内町新誌編集委員会 川内町                 |

# 編集後記

松前町では、毎年教育委員会主催で文化財めぐりを実施しています。当初は、松前町の小・中学校に初めて赴任された教職員に、地域に根ざした教育を実践してもらうために、その一環として地域を知ってもらうため、町内の文化財めぐりをしてきました。その後、教職員だけでなく、一般町民も参加させてほしいとの要望に応え、一般町民の方にも参加してもらうようにしました。

ところで町民の方は、毎年町内では興味も薄れるし、参加者も減少してきました。そこで、松前町の人物に関係のある近隣の市町村の史跡や文化財等を訪ねようということで、資料を作ってきました。それをまとめたものがこの冊子です。

松前町の先人の偉業を知る一助ともなれば幸いです。

なお、疑問点やお気付きの点がございましたら、お知らせ願います。

松前町文化財保護審議会 会長 戒田 光一

## 編集委員

(松前町文化財保護審議委員)

相原 隆志	鶴 吉	中村 文雄	永 田
戒田 光一	塩 屋	西村 博明	出 作
郷田 光生	大 間	早瀬 辰郎	東古泉
重川 雄才	昌農内	平井 屯	昌農内
白石 純雄	北黒田	山口 稲男	神 崎

平成13年11月30日 発行

**松前町にかかわる近隣の史跡・文化財等**

題 字 町長 白 石 勝 也  
写 真 戒 田 光 一  
編集者 松前町文化財保護審議会  
発行者 松 前 町 教 育 委 員 会

